

と も に 生 き る

北海道の労働と福祉を考える会

〈発行所〉〒004-8631 札幌市厚別区大谷地西二丁目3-1木下武徳研究室
 〈電話〉090-7515-8393 〈WEBサイト〉<http://roufuku.org/>

1 新年度 事務局長 あいさつ



事務局長の大瀧雅史君。精悍な顔立ち。

労福会活動報告

四 五日、十五日：夜
月 回り

五 三日・十七日：夜
月 回り 三十一日：
炊き出し、総合相
談会

六 七日、二十一日：
月 夜回り 二十八
日：炊き出し

七 五日・十九日：夜
月 回り 十二～十三
日：地域寄せ場交
流会（名古屋）

八 二日・十六日・三
月 十日：夜回り 三
日：炊き出し・法
律相談会（札幌市
と共催）

この他にも、講演活動や、意見交換会への参加など、さまざまな活動を行っています。

こんにちは、今年度の労福会の事務局長になりました、北海道大学文学部三年の大瀧雅史です。

さて、まず先に、みなさんに謝らなければならないことがあります。それは今年度の会報第一号であるこの号が、一年の折り返しの時期である九月まで発行できなかったということです。本来ならば、四月以降、定期的に会報を発行し、活動に参加されている方にはもちろん、直接活動に参加することのできない賛助会員の方にも活動の様子をお伝えするべきだと思います。申し訳ありませんでした。

しかし、労福会は決して今年度（そして昨年度）に活動を「怠けて」いたわけではありません。むしろ過剰に忙しく、そのために会報を編集することさえできなかったのです。

そして、それは実は現在の労福会の直面している問題でもあるのです。僕が、現在の労福会が解決すべき課題であるだろうと考えているのは、労福会の「考える会」としての意義の再考です。本来、労福会は「労働と福祉を考える会」という名前が示すとおり、「野宿者問題とは何か」「野宿者支援とは何か」または「支援はいかにあるべきか」ということを考える場であると思います。

しかし、最近の労福会事務局は（昨年度以前から）過密なスケジュールで活動を行っており、そのあり方について、メンバー内でじっくりと考え、話し合う機会がなくなってしまう状態にあります。そのため、例えば炊き出しを行う際にも、メンバー間で十分に話し合うことができず、前回の炊き出し後の反省会で挙げられた意見などが何も反映されない、といった状況に陥っています。会報の遅延も、活動メンバー獲得のための宣伝不足も、そうした原因によるものといえます。

そうした事情から、僕が今年度（後

期）の労福会が目指すべきであると考えてるのは、労福会の現状についていったん立ち止まって考えてみるのだと思っています。スタッフどうしで積極的に集まり、そのあり方について話し合い、考えるということ。それを通してしか労福会の活動の姿は見えてこないと思いますし、それこそが「考える会」としての労福会のあるべき姿だと思います。

具体的には、現在の活動頻度を下げることや、団体の編成なども行うなどの案があるかもしれませんが、それも含めてこれから話し合っていかなければいけないと思います。そのための内容を決めていくためにも、みなさんのご協力が必要不可欠だと思います。

長くなりましたが、言いたいことは「労福会の活動をよりよいものにするために、みんなで頑張っていきましょう」ということです。それでは、僕も精一杯頑張るので、これからもよろしくお願いします。

労福会 事務局長 大瀧雅史

新規会員募集・カンパのお願い

現在、労福会は、活動に継続的に参加してくれるスタッフ不足に悩んでいます。新規会員、スタッフは随時募集していますので、興味のある方がいらっしゃれば連絡をお願いいたします。

また、慢性的な活動資金不足も深刻な問題となっています。そこで、労福会では皆様からのカンパを募集しております。いただいたカンパは、野宿当事者支援のための活動資金（炊き出し準備費など）となります。よろしくお願いいたします。詳しくは事務局までご連絡ください。

カンパの送り先（郵便振替口座）

02730-0-37163

口座名称：

北海道の労働と福祉を考える会

2 労福会の意義と役割

何度も言われますが、労福会は、北海道の労働と福祉を「考える会」です。考えるためには、いろいろな情報がなければなりません。何も知識がなければ考えることも難しいです。では、北海道の労働と福祉を知るためにどうしたらいいのか。北海道の労働と福祉といってもそのようなものをまとめたものはなかなかありません。そのため、現場に出向いて学ぶことが大事です。そうして、考えてどうするのか。良いと思ったことは評価し、悪いことは問題として取上げ、改善していくことが求められるでしょう。つまり、労福会には、学び、考え、行動する、そういうことが必要でしょう。

労働と福祉をどこから考えるのか。私が学んだ大学の社会福祉業界では「底辺へ向かえ」という言葉がよく言われていました。つまり、最も困難な状況にある人々に目を向けることが大事だということです。最も福祉の支援を受けられやすい人は、お金があり、自分の意思を明確に話すことができ、社交的な人です。しかし、実際には、お金がなく、自分の気持ちをうまく話せず、孤立した人に生活問題は集中しています。野宿を強いられている方はまさにその状態にあります。最も社会福祉やよりよい条件の労働が必要なときに、最も排除される状況にあります。

このような問題に労福会が何ができるのか。労福会のメンバーは学生や市民のボランティアであり、常に別の学業や職業等の本業あるなかで活動しています。そのようななかで、貧困やホームレスの問題はあまりにも大きな問題です。しかし、これまでの活動からも分かるように、(1)野宿されている方と向き合い、話をし、人とのつながりをつくり、生きるということに少しでも希望がもてる支援をすることはできます。また、(2)緊急の深刻な問題を抱えている人については、行政や病院、また司法書士の方やなんもさサポート等専門的に支援をしている方につなぐことによって対応できます。そして、(3)このような社会的に軽視されがちな問題について、シンポジウムや講座などで実態を伝えることで、社会で適切に対応すべき問題に変えていくこともできる可能性もあります。さらに、(4)このような学習を経て、生活保護制度や救護施設、他の支援団体等の社会資源を知り、様々な問題への対処方法を学ぶことで、当該問題に対する最善の支援を実行することができると思います。

労福会は、いまいろいろ問題を抱えているところですが、これらの意義を、私自身も含めて労福会のメンバー1人1人が活動体験のなかで理解していくことができればと思います。こうして、私達の1人1人の小さな力を多くの人と共有し、札幌、北海道の労働と福祉について、今後とも考えていければと思っています。

北海道の労働と福祉を考える会 代表 木下武徳

炊き出しの感想

2008年6月28日、8月3日に旧豊水小学校で炊き出しが行われた。特に、8月3日の炊き出しでは、いままで炊き出し終了後に参加スタッフが簡単に行っていた反省会を取りやめ、参加スタッフが感想文を書いて、担当者がまとめることになった。ここでは、炊き出しのあり方、やり方についての提言が含まれているものをいくつかを取り上げてみたい。なお、本会報に載せられている炊き出しの写真は6月28日のものである。

・労福会のベテランスタッフ不足。そのため、労福会経験が長くない人がたくさんの仕事を任されることになるが、それを補うようなマニュアルもないうえ、ノウハウが蓄積（継承）されていない点が問題である。

・散髪するとき、野宿者の座る方向を変えたほうが良い。「さらし首」のようで嫌だ」「恥ずかしいから仕切りをしてほしい」と言っている野宿者がいた。

・炊き出しの仕方について、当事者の意見や希望も聞いてみたい。音楽をかけたり、莫座を敷いてごろんとできるスペースを作るなど、もっと工夫できるのではないかな。

・野宿者のなかには、過去に法律を勉強していて自分で破産手続きをした人や、散髪の技術があるという方がいて、お互いに助け合える知識や技能・経験を持った人が沢山いそうだが、これらを繋ぎ合ったら何かできるのでは、と思った。

・叶うなら、参加者全員でトウモロコシや新ジャガなどをワイワイ、ガヤガヤどっさり食べたい、と感じる雰囲気の炊き出しだった。

編集者総括：炊き出しは何のために行うのか。その第一目的は、野宿者の方々にひと時の憩いの場を提供することなのか。生きていくために必要な物資を提供することなのか。野宿生活から脱却するための情報を提供し、それを手助けすることなのか。スタッフ不足や、細かい対応ミスを避けるための対策も必要だが、それ以上に、「炊き出しの目的」を共有するための話し合いが必要であろう。

会員へのお知らせ

現在の労福会が抱える問題の一つとして、「会費の未払い」が挙げられます。この場を借りて、再度確認させていただきます。

一般会員：5000円(年額)

学生会員：3000円(年額)

賛助会員：

個人会員10000円(一口)

団体会員20000円(一口)

会費の送り先は、前ページに掲載したカンパ送り先と同じです。未払いの方がいらっしゃいましたら、お振込みをお願いいたします。

炊き出しの風景より。大勢のホームレスの方々が旧豊水小学校に集まった。



3 ホームレス支援の「実体験」から

私が労福会の活動に参加する以前のことで。終電かい時間に大通りの地下鉄の階段を下りている時、ホームレスのおじさんが、大きな荷物とシートを階段に置き、本を読んでいるのを見ました。私は少し驚き、おじさんを気にしながら横を歩いていきました。目があったので「おやすみなさい。」と声をかけてみると、笑ってくれたので、嬉しくなりました。

私は一緒にいた友達から後で「何言ってるの？」と驚かれました。確かに見知らぬ人に突然挨拶する、なんてことはめったにないし、普通に考えておかしい事でした。しかし、路上でこれから寝ようとしている人を見て、何も見ていないかのように通りすぎるのも、悲しい気がしました。

そんなことを考えながら、労福会に参加し始め、もうじき1年が経ちます。

夜回り活動で多くの方々と話していると、派遣労働に携わっている人のお話を聴くことがあります。世の

中では「労働者派遣法」などが話題になっていますが、それは深刻な問題なのだ、と考えるみたりしながら、社会に目を向けることを知ることができたのも私にとっては、この活動があつてのことだと思ひ、学生生活で貴重な体験です。

しかし、自分ばかりが勉強になるから、といって活動しているだけではないということも同時に感じます。ある時「こないだとは別の人が来て、また同じことを訊く」と不機嫌そうに言われたことがありました。もし重要な相談があれば、それはその人の生活の一部にでも関わっていることになるので、興味本位以外の思いで、自分自身が真剣に向かい合う必要があるということに気づかされました。

国には「ホームレス支援事業」というものがあるのだから、ちゃんと機能して欲しい！と考えるだけでなく、私は、多くの学生や社会人が集まって、自分達が見るものからその問題を知り、考えていくことが大切だと実感しています。

労福会 事務局次長 池内未希

夜回りを体験してみませんか？

労福会では、第一、第三、第五土曜日の夜六時から事務局会議、夜八時から夜回り活動を行っています。事務局会議は北大内で、また夜回り活動は地下鉄大通り駅の、通称「ヒロシ前」に集合し、そこから札幌各地に移動しています。会員ではない方でも参加できますので、どうぞお気軽に参加してみてください。詳細は事務局まで連絡をお願いいたします。

夜回り活動より。カップラーメンを渡し、世間話をする。健康状態などの相談を受けることもある。



4 ビックイシューの販売情報

ここでは、ビックイシュー札幌における販売情報をお知らせします。ご存知の方が多いとは思いますが、ビックイシューとは、ホームレスの方が販売する雑誌であり、その売り上げが直接的に自立に繋がるとして、注目を集めています。

① JR札幌駅入り口、紀伊国屋書店筋向い(販売時間:11時~13時・16時~18時)

② 北海道庁北門前

③ 大通公園三丁目(駅前通三丁目側)(②、③共に平日9時~17時、土曜日2時~4時)

④ JR札幌駅北口広場東側(11時30~1時20分、15時40分~17時30分{日曜日は17時まで})

⑤ 地下鉄琴似駅一番出口ダイエー前(11時~13時)

編集後記 会報責任者 新川拓哉

ある友人がこのように言った。「なんでホームレス支援なんてやってんの？就労支援には大賛成だよ。でも、働く気のないやつを支援する必要はないよ」と。私は、ここに大きな誤解があるように思う。あるホームレスの方は、自分だけでなく、大部分のホームレスが仕事をしたいと思っている、と言った。働く気がないのではなく、働く気だけでは働けないのが現状なのである。

私は、支援をする理由など、「しないではいられない」で十分だと思う。腹を押さえて苦しんでいる人がいれば、「反射的に」近寄って声を掛けるように。だが、ホームレス支援における「反射」を持っている人は多くあるまい。それゆえ、私たちが考えなくてはならないのは、ホームレスの「働く気」を生かせるような支援を考えることと、ホームレス支援を、善意を動力にするものに留めるのではなく、利潤を動力にするものに発展させることではないだろうか。

マイクロファイナンス(4P参照)はこの二点において非常に優れている。まず、マイクロファイナンスにおいては、受けた融資をどのように活用するかについて、専門家の手厚い援助が受けられる。なぜそこまでしてくれるのか。簡単である。カネを貸したからには、返してもらわなくてはならないからだ。その真剣さは、役所が「法に従って」為す就労支援とは雲泥の差であろう。確かにそれは善意からのものではないかもしれない。しかし、単なる「同情」よりも、よっぽど親身で、よっぽど有用であろう。

北海道から日本のマイクロファイナンスを始めてみませんか？

特別寄稿：北海道大学公共政大学院教授 菅 正広

「マイクロファイナンス」という言葉を聞いたことがあるでしょうか？

マイクロファイナンスは、バングラデッシュのグラミン銀行総裁のムハマド・ユヌスさんが2006年にノーベル平和賞を受賞したことで、日本を含めて広く世界に紹介されました。「バングラデッシュなどの開発途上国で貧しい女性などに5人1組で行われる小口の無担保融資」などと高校などで習ったことがある人も多いと思います。

マイクロファイナンスとは、「担保となるような資産を持たず金融サービスから排除された貧困層や低所得者層に対して、小規模の無担保融資や貯蓄・保険・送金などの金融サービスを提供し、彼らが貧困から脱却して自立することを目指す金融」のことを言います。

その理念とするところは、ビジネスの手法を使って私的利益と社会的利益の二元的利益の両立を追求することです。マイクロファイナンスは、公（政府）でも民（マーケット）でもない、新たな「第三の道」と言えるでしょう。「民が担う公共」とも言えるかもしれません。

ところが、日本では、「1億総中流」の豊かな日本に貧困など存在しないと思われていたり、マイクロファイナンスは開発途上国のもので日本には関係のないことと思われているようです。本当にそうでしょうか？

この会報をお読みの方は、日本の貧困の現状にご関心があり、かつ実際に行動に移されている方が多いと思いますので、そのような日本の貧困の現状に対する認識が間違っていることはご承知のことと思います。

また、マイクロファイナンスは一般に考えられているように、開発途上国だけのものではありません。1990年代以降、欧米諸国など先進国においても、通常の金融サービスを受けられない貧困層・低所得者層に対して金融サービスを提供し、社会的排除をなくす手段としてマイクロファイナンスが実施されています。

たとえば、アメリカでは、アクション（ACCION USA）、地域開発金融機関（CDFI）、KIVA、MFIC、カルバート社会責任投資財団などのマイクロファイナンス機関がアメリカ国内外の貧困層・低所得者層に融資を行っています。イギリスではストリートUKやCDFIが、フランスではADIEが、オランダではトリオドス銀行やオイコクレジットなどがマイクロファイナンスを実施しています。

マイクロファイナンスは、開発途上国だけでなく、先進国でも貧困対策として有効かつ必要な手段であることが実証されているのです。他方、日本では、現在のところ、マイクロファイナンス機関と呼べるものはほとんどありません。しかし、日本にも応用できるマイクロファイナンスのビジネスモデルが存在します。それは、5人1組ではなく、小口融資といっても欧米諸国のマイクロファイナンス機関がそうであるように、数万円～数百万円の融資額になるでしょう。日本でもマイクロファイナンスは貧困削減に有効な手段たり得ます。

また、マイクロファイナンスによって国内外の貧困を削減するために、私たちは市民（個人一人ひとり、NPO）、一般企業、金融機関、政府など各々の立場で、役割を果たすことができます。マイクロファイナンスが日本に普及するかどうか、そして貧困問題が本当に解決するかどうかは、私たち一人ひとりが他人のことを自分のことと同じように考えられるかどうかにかかっています。言い換えれば、私たちの社会が「共感」を持って貧困を考えられるかどうかにかかっていると言えるでしょう。

その「共感」がある限り、日本でもマイクロファイナンスを始めることは見果てぬ夢ではないと、私は信じています。

【マイクロファイナンスにご関心・興味のある方は、菅正広著『マイクロファイナンスのすすめ』（東洋経済新報社）（10月刊行予定）に具体的な政策提言を含めてマイクロファイナンスについて詳しく書かれていますので、ご参照下さい。】